

上三川町のなみのり

多功宿問屋喜兵衛、助郷の免除を願う

1750 (寛延元) 年2月3日

江戸時代は街道を中心とした各種交通が発達しました。東海道・中山道・日光道中・奥州道中・甲州道中といった五街道を初め、多くの街道が整備され、道沿いには宿場が展開しました。上三川町の西には日光道中が通り、今の石橋駅周辺が石橋宿として繁栄したことは有名ですが、上三川町にも宿場として栄えた場所がありました。

実は日光道中のほかに、江戸の町から下野に至る道はいくつかあり、その一つに関宿通多功道(協往還日光東街道)と呼ばれた幹線道路がありました。関宿(現・千葉県野田市)から茨城県結城市を経て、下野市仁良川から上三川町多功に至り、上三川町鞆堂にて日光道中に合流する街道ですが、現在の多功十字路付近に多功宿が置かれました。多功宿は宿場の事務所ともいえる1軒の問屋が置かれ、大名たちが泊まる本陣をかねていました。1805(文化2)年に宿内には113軒の家が並



現在の多功宿の様子

び、500人近い人々が暮らしていましたが、石橋宿と比較すると小規模な宿場でした。

宿場は単に旅人の休憩の場ではなく、幕府や大名たちの荷物や手紙などを運ぶため人や馬を常に備えていましたが、不足が発生した際には、人や馬が徴発される村が決められていました(助郷)。ただでさえ、普段の農作業が忙しい人々にとつて大きな負担でした。上三川町の範囲は、これらの

街道に隣接する地域であることから、ほとんどの村が小金井宿・石橋宿・雀宮宿・多功宿の助郷を命じられ、交通量が増大した江戸時代の中・後期には、臨時の助郷を命じられたり、お金を納めたりと、大きな負担となりました。

今回の事件があった1750年は、江戸幕府三代将軍の徳川家光の百回忌にあたり、日光東照宮参詣のための大規模な通行に対処するため、多功宿を初め関宿通多功道の宿場に大きな負担を命じました。しかし、明らかに負担に耐えられないことから、助郷の免除を願うこととなったのです。將軍の日光社参や東照宮の大祭には多くの武士が通行したこと、他の街道に比べると、本地域における負担はかなり大きいものがありました。そしてたび重なる大きな負担によって、農村は次第に疲弊していったのです。

た報短歌

横揺れの激しき列車雨の夜を

北に向ふる客わづかなり

稲葉 敬子

夕映えに姿清しき遠富士の

上の眉月寒空に浮く

高田 幸子

求め来し真実一路の裁きの日

貴重体験と心にげきを

小島 キミ

角帯の教師と生徒のお点前を

受けて温もり心に届く

武藤 ひさ

銀杏葉の散り果てし枝に残る実の

たわわに浮かぶ師走の夕べ

井沢 和江

年くるる夜の炬燵の祖母に聞く

遠き原ゆく狐火の列

斎藤アツ子

幼等の命はかなく消されたる

哀しき叫び流星のごと

菊地 美代

